
四泊五日グルメな子猫ちゃん体験ツアー

AQ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四泊五日グルメな子猫ちゃん体験ツアー

【Nコード】

N0481Z

【作者名】

AQ

【あらすじ】

大学二年の夏休み。彼女のヒロミと喧嘩して引きこもる、ヘタレ男子・ヒデキ。

生意気な飼い猫ゴローを世話する彼に、突然の悲劇が……！
笑って泣けるギャグ猫コメディです。

※一部猫の生態描写（シモ系・病気）アリ。苦手な方はご注意ください……。

『グルメ猫・その1』

◆一日目・昼。

『ずっと、疑ってたんだ……？』

『いや、それはその……』

『分かった！ もうイイッ！』

『ちよっ、待てよっ！』

「――博美っ！」

叫んだ自分の声に驚き、目が覚めた。

次の瞬間、頬に横殴りのパンチが浴びせられ、俺は我にかえる。

ここは自宅リビングのソファだ。転寝していた俺の目の前にはゴローが居て、何度もしつこくパンチを食らわせてくる。俺の鼻先を狙い、時には爪を立てる……一匹の子猫が。

「ニャアー」

「夢だったのか……いや、夢じゃないよな……」

「ニャウアー」

「ああ、分かったよ。ご飯だろっ？」

「フニャーッ！」

普段は名前を呼んだところで無視するゴローが、『ご飯』の一言に反応し、リビング隅の餌タッパーへすっ飛んで行った。寝ぼけ眼をこすり、ついでに口の端から垂れていたヨダレを拭いながら、俺は興奮して細長い尻尾をくねくねさせるゴローに近づいていく。タッパーを開け、取り皿へ一食分をザラリと入れるそのスプーンを押し退けるように、ゴローが鼻面を突っ込んできた。

リビングの柱時計を見上げると、もうとっくに昼を過ぎていた。

ゴローが腹を空かせるわけだ。

若干一才三ヶ月にして『ご飯』という言葉覚えてたゴローは、かなりグルメな子猫だ。得意技は『猫またぎ』……猫もまたいで通り過ぎるくらい不味い食べ物ということわざだが、激安カリカリと高級カリカリの味の差を瞬時に察知し、安い餌はニオイも嗅がずにスルーする。

その一方で、美味しいご飯をくれる人物も記憶できるらしく、たまに高級ネコ缶を手土産にうちを訪れる博美には「ミャアー」と甘えた声で鳴いて擦り寄る、見事な猫かぶり技術。

しかし、彼女がこの部屋を訪れなくなって早三日……ゴローのピンポン玉サイズな脳ミソからは、既に博美の存在は消えてしまったかもしれない。

俺の心からも、いつそ消えてくれたら楽になれるのに。

「ゴロー、俺の恋人はお前だけだよ……男同士だし、種族も違うけどいいよな？」

「フシャーッ！」

俺が抱き上げようとすると、ゴローは身をよじって俺の手を振り解いた。尻尾をパンパンに膨らませて俺を見上げると、フンツと鼻を鳴らし再びカリカリの残りへと向かう。

俺の愛は、カリカリに到底及ばないらしい。

＊

美味そうに舌なめずりするゴローを見ていて、少し食欲が湧いてきた俺は、冷蔵庫や食器棚を漁りレトルトカレーを発掘。既に賞味期限は切れていたが、買いい物に出かける意欲もないのでそれを食べることにした。片手鍋に湯を沸かしカレーを温める間に、冷凍してあった一食分の米をレンジにかける。

「しかし、今日も暑いなー」

ガスコンロ奥の窓を開けてみるものの、体感温度は一切は変わら

ず、むしろ蟬の音が暑苦しい。

俺が住むこの家は一応実家なのだが、現在父親は九州へ単身赴任中。母親はそっちに入りびたりで年末くらいしか戻ってこない。年の離れた姉はとくに嫁いでしまった。よって俺は、古い一戸建てに一人暮らした。

博美は「このレトロ感が落ち着くよ」と褒めてくれたが、俺は今時クーラーも無いこの家に不満たっぷりだ。しかし、そろそろ築四十年を迎える、スカスカで密閉性の低すぎるこの家にそんなものをつけるのは『猫に小判』という母の主張も、確かに的を射ている。

とはいえ、暑いものは暑い。「自分は親父のマンションで快適な生活をしているくせに……」と、先日電話で嫌味を言ってみたところ、「欲しいなら、あんたのバイト代で買いなさい」と切り返されてしまった。

大学生は立派な大人だという母のポリシーにより、俺は仕送りをもらっていない。時給九百円のカラオケボックスでバイトをし、生活をやりくりしている。食費や光熱費はもちろん、学校で必要な教材、サークルの活動費、ケータイ代、猫の餌、なにより博美とのデート代……試験が終わった日、“自分へのご褒美”に一枚千円の古着Tシャツを買ったのがささやかな贅沢だった。

「博美は、俺のこと考えてくれてたのにな……」

良く手料理を作ってくれたのは、俺の家計と栄養状態を心配したからだ。博美の作ってくれるカレーは、本当に美味かった。

俺は、具の见えない安物レトルトカレーを皿に盛り付けながら、ため息をついた。

大学に入学してすぐ、適当に選んだイベントサークル。そこに博美が居た。

「あのう……猫って、好きですか？」

名前も名乗らず放たれた第一声に、俺は何だコイツと思いつつも「好きだけど？」と返事をした。

すると博美は「実家ですか?」「ご家族は?」「家にペットは?」
と矢継ぎ早に質問を重ね、最後は「これはもう、一匹飼うしかない
ですね! イイ子がいるんですよ!」と飲み屋街のポン引きのよう
にニヤリと笑った。

つまりゴローは、もともと博美の家の猫だった。飼っていたメス
猫に子どもが生まれたため、引き取り手を捜していたのだ。

猫は好きだし、母親も「世話ができるならいいわよ」と言ってく
れたので、人助け感覚で譲り受けたのが去年の春。子猫の中で一番
貧弱だったゴローを心配して、博美は良くうちに遊びに来るように
なった。最初はサークル仲間で誘い合わせていたのが、夏休みに入
る直前に「ねえ、今度は一人で遊びに行っていない?」とほんのり赤
い顔で囁かれたとき、俺は両思いを確信した。

博美の家は大学から遠く、この家に入り浸るのにそう時間はかか
らなかった。

まだ手乗りのチビ猫だったゴローが足元にじゃれつくのを、キッ
チンに立った博美があしらいながら、「もー、ゴロちゃんあっち行
ってなさいっ! 今包丁使ってるんですからねっ」と真剣に話しか
ける横顔が可愛かった。もし博美と結婚して子どもが出来たら……
なんて甘い妄想を抱きながら、俺はエプロン姿の博美の後姿を見つ
めていた。

一年ほど、周囲が羨むのを通り越して呆れるほど順調な交際が続
いていたのに……。

ちょうど三日前に、初めてのケンカをした。

軽く意固地になった俺は、電話もメールもシャットアウト。バイ
ト先にも「夏風邪をこじらせたのでしばらく休みます」と嘘を告げ、
その後家から一步も出ず、抜け殻のように過ごしている。

「はあ……博美、今頃何してんだろーな……」

開いた窓の向こうに目をやれば、もさもさと生い茂る雑草の緑。
猫の額ほどの庭は、現在荒れ放題で目も当てられない。博美は「

夏休み入ったらお庭掃除して、バーベキューしようね」と言っていた。夜は外の方が涼しいし、それもいいなと俺は頷いた。それなのに。

料理も掃除も、一人じゃ何にもやる気が起きない。

「ニャアー」

ご飯を食べ終えたゴローがキッチンに駆け込み、俺のふくらはぎに体を擦り付けて来た。もっと寄越せという合図だ。

涙ぐんだ俺が、温もりを求めて抱き上げようとすると、「フーッ！」と叫んで爪を立てる。

「あっそ。そういう生意気な態度取るなら、お代わりなんてやらねーよっ」

子どものように拗ねた俺は、カレー皿を持ってリビングのテーブルについた。ずいぶん体も大きくなったゴローは、テーブルの上へ軽やかに飛び乗ると、フンフンと鼻を鳴らしながらカレーに近づいてくる。

「おいおい、これはお前の飯じゃねーぞ？」

「ンナアー」

分かっていると言いたげに一鳴きし、ゴローはその場に尻餅をつくと、後ろ足で耳の裏を掻きむしった。

『――カッカッカッカッ！』

「うわっ、バカヤロ！」

扇風機の風に乗り、抜けた毛束がふわりとカレーへ移る。

慌てて皿を持ち上げ避難させた俺は、なんら悪びれずにテーブルへ寝そべる茶色い塊を睨みつけた。

「てめー……後で風呂に入れてやるっ」

ゴローは『ご飯』以外の言葉は分からないため、俺の脅しにもひるまず、ふてぶてしく尻尾をパタパタと振っている。

猫の毛が春から夏にかけて抜けやすくなることも、風呂が大嫌いなことも、噛み付かれると案外痛いことも、全部博美が教えてくれた。こうして尻尾をパタパタせわしなく動かすのは「バトルモード

だね。猫じゃらしで遊んであげると喜ぶよ」と言っていたっけ……。
「あーもう、俺は女々しすぎるっ！ さっきから博美のことばっか
考えて……ちくしょー」

食い終わったらめいっぱい遊んでやろうと思いながら、俺は猫毛
を適当に取り除いたカレーをかき込んだ。少し温くなってしまった
から、その分一気に食べることができた。

普通に、美味かった。

普通……のはずだった。

それなのに、食べ終えた俺の頭はぼんやりし、皿の上にスプーン
を落としていた。

『ボーン……ボーン……』

柱時計がのんびりと二つ鐘を打ち鳴らす。その音が、なぜか耳の
奥で何重にも反復して聞こえる。

視界も一気に変わる。見えていたはずの木目のテーブル、白いカ
レー皿、銀のスプーン、その脇に寝そべるゴロー。全てが消え失せ、
代わりに見えたのは……。

「床……」

俺は、確かに椅子の上に居る。

なのに、見えているのは『テーブルの下の世界』だった。

「なっ……なんじゃこりゃ！」

俺の脳裏に、有名な漫画がいくつも思い浮かぶ。

黒ずくめの悪者に妙な薬を飲まされ、子どもになってしまった自
称探偵の高校生。赤いキャンディーや青いキャンディーを飲み分け
ることで、伸縮自在になる女の子。恋人が突然手のひらサイズにな
ってしまふという、悲しきラブストーリー。

俺の体は、縮んでいた。

しかし、体に痛みなどはない。視界はクリアだし、耳から聴こえ
る音も鮮明過ぎるほどだ。ただ、耳の裏が異常にかゆい。俺はその
かゆみに耐えられず、思い切り掻きむしった。

『——カッカッカッカッ！』

どこかで聴いた音がする。

どこかで見たふわふわしたモノが目の前を飛んでいく。

俺は安っぽいテーブルの天板裏面を見上げた。

見たくない。自分の姿は見たくないっ……。

「ふーん。人間の体って面白いね」

聴こえたのは、俺の声じゃない。だって俺は口を開いていないから。でもここには、俺以外の人間は居ないはず……。

ガクガク震える俺は、神の手ならぬ俺の手でひょいっと持ち上げられた。慌てて目の前の古着Tシャツにしがみつくと、俺の指から鋭い爪がニョキッと伸び、自動的に布地へ食い込んだ。

「ヒデキ君、キミはこのTシャツを気に入ってたんじゃないの？」

そんな風に爪を立てたら、穴が開いちゃうよ？」

俺の頭の上から話しかけてきたのは、確かに俺だった。

俺はそのときようやく、自分にピッタリのファンタジー作品を思い出していた。

「俺がゴローで、ゴローが俺で……」

震えながら、俺は……失禁した。

ゝグルメ猫・その1ゝ（後書き）

←解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

この話は個人的お気に入り作なのですが、何がイイって、猫ですよ！ 猫は正義！ 「あまりにも猫キャラが強烈で、ストーリーが霞む」なんてご評価をいただくくらい猫フルな話です。もちろん、猫を飼っていない方にもハウツー的に楽しめる内容になっていると思います。今回の見どころは、ズバリ『柱時計の音』でしょう。ボイン×2って……というのはさておき、超ベタベタ王道な入れ替わりですね。ここで「うへー、ベタ過ぎる」と思ってバックしてしまいう方がいるのではと心配になるくらいベタ。でもこの先に数々のシモギャグトラップと、さらに先にはちよっぴり感動な展開が待っていますので、どうぞお楽しみに。

くグルメ猫・その2く

2. 一日目・昼。（後編）

目の前には、パンツ一丁の俺……の姿をしたゴローが居る。

俺はいええ、濡れネズミならぬ濡れネコとなって、相変わらずブルブル震えていた。

なんという恐怖体験……風呂とは、あれほどまでに恐ろしい場所だったとは！

「あー、お風呂ってあんなに気持ちいいものだったんだねっ」

満足気に目を細めるゴローを、俺は唸り声とともに睨みつけた。

常に動じない……悪く言えばオッサン臭いと周囲から評される俺にしても、この状況はショッキング過ぎる。気を抜くと、また漏らしてしまいそうだ。

ピンポン玉サイズに変わった脳ミソを必死でフル稼働させ、俺は一つの結論を導き出した。

——そう、きっとこれは夢なのだ。

リアル世界の俺は、カピカピに乾いたカレー皿の脇に突っ伏し、テーブルに涎を垂らしながら転寝しているはずだ。最近眠りが浅かったから、疲れが出たに違いない。

しかし夢の中で猫になるなんて、俺の脳ミソにも案外ファンタジックな妄想が詰まっていたものだ。

「まあ、ヒデキ君がどう理解しようと勝手だけどさー」

猫っ毛でもつれやすい俺の髪をわしわしとバスタオルでこすったゴローは、そのタオルで猫の俺を包み、同じように乱暴に擦りあげる。

「おいっ、ゴロー、痛いって！ もっと優しくっ！ あ、ヒゲがもげたっ！」

「キミがいつもボクにしてくる時はもっと乱暴だよ。はい、おしま

い。あとは毛づくろいで乾かして」

ゴローは二人分の水滴を吸ったバスタオルを軽くはたくと、ソファの背もたれに広げてかけた。飛び散った猫毛は粘着コロコロで掃除し始める。俺には無い、まさに猫らしい几帳面さだ。

俺はといえば、“毛づくろい”という言葉聞いて、ぷくつと尻尾を太くし固まっていた。

実はさっきから、ある欲求に苛まれていたのだ。

この、濡れた体が気持ち悪い。ざっくりタオルで拭いてもらっただけでは、物足りない。

舐めたい……。

舐め……。

「くそう、俺は人間だっ！ なめんなよっ！」

俺はソファの上から華麗に飛び去り、猫パンチで扇風機の角度を下向きに変えた。一度ソファに戻ると、口にバスタオルを咥えて風の当たる場所へ行き、床に置いたバスタオルの上を転げまわりながら、自分の体を少しずつ乾かしていく。

そんな俺の行動を見て、ゴローは鼻で笑った。

「ははっ、ヒデキ君はバカだなあ。舌で己の体を舐める気持ちよさを否定するなんて。そう、それはキミが毎晩布団の中で行っている」

「――それ以上言うな！」

俺は羞恥心で真っ赤に……なる代わりに、グーの形に固定された手で顔を何度もこすった。

ヤバイと思ったときは、もう遅かった。動揺のあまり、自動的にチラリと舌が出てしまった。

しっとり濡れた自分の腕に、ざらつくサンドペーパーのような舌が触れたとき……。

「――にゃはうっ！」

ピリビリと、自分の体に電気が走る。

なんということでしょう……。

自分の中の、まだ押されていない快樂のツボをグリツとされたよ

うな……。

「ほらほら、遠慮しないでもっと舐めていいんだよ？」

ゴローのドS風味なからかいても俺の猫耳には入らず、夢中で何度も舌を出し続けた俺は、完璧な舐め猫になっていた。

＊

夕方になり、辺りが薄暗くなってくると、俺の体をしたゴローはそわそわし始めた。

「ねえ、ヒデキ君。だんだん目が見えなくなってきたんだけど……」

「当たり前だろ。暗いんだったら電気つけろよ」

「あ、そっか。人間は行灯あんどんの代わりに電気を使うようになったんだっけ」

「行灯って……良くそんな言葉知ってるなあ」

俺のツツコミに「良くぞ聞いてくれました！」と膝を打ち、ゴローは立ち上がった。

「実はボクの家系って、いわゆる“猫又”の血筋なんだよね」

「猫又って、古典なんかに出てくる、あの？」

「そう、二十年生きた猫だけになれるという、伝説の勇者……」

俺の頭脳を使っているせいか、ところどころ語彙がおかしくなりつつ、ゴローは語った。

「ボクはまだ子どもだけど、将来は立派な猫又になりたいと思ってるんだ。今はその修行中」

「へえ、そりゃ大変だ」

どうせ夢の中の出来事だからと生返事をする俺に、ゴローが不機嫌そうに眉根を寄せる。自分の姿を見て思うのも微妙だが、こういう不遜な表情がなんとも憎たらしい……。

貧弱な体とメンタルのくせに、俺はこうしてすぐ虚勢を張るのだ。だから、博美にもすぐ謝れなかった……。

ふにゃーとため息を漏らした俺に、若干口調をやわらげたゴロー

が話しかけてくる。

「まあ、ヒデキ君には信じられないかもしれないけど、これは本当の話だよ。猫又になるための試練の一つが“人間と入れ替わる”ことなんだ。ここで挫折する猫は多いし、この若さで成功したボクは優秀なんだよ」

「へえ、そりゃ良かったな」

「なんかバカにしてるっぽいけど、けっこう大変だったんだよ？」

この一年キミに……ううん、なんでもない」

言いかけて止められると、非常に気持ちが悪い。

俺は、好奇心にかられて尋ねた。

「なんだよ、俺に何かしたってのか？」

「うーん、聞かない方がいいかもよ」

「どうせ夢なんだ。かまいやしねーよ」

「じゃあ言うけど……人間と入れ替わるためには“ボクの体の一部”を一定量食べて、同化してもらわなきゃいけないんだよね」

「体の一部……？」

俺は思わず、自分が寝そべっているバスタオルを見つめた。散々転げ回ったせいで大量の抜け毛がくっついている。首振りする扇風機の風が吹き付けるたびに、何本かが綿帽子のようにふわりと浮かんで飛んでいく。

「……そーいやお前、俺が飯食ってるときに限ってテーブル乗って、体搔いてやがったなあ」

「あ、気付いてたんだ。さすがヒデキ君」

青黒い無精ひげをザリザリとさすりながら、ゴローは俺に得意げな笑みを向けてきた。

「猫と人間が入れ替わる条件は、お互いの相性もあるんだけど、基本は“ヒゲなら一本、毛なら五百本”なんだ。今日はちょうど記念すべき五百本目。おめでとうっ」

どこかで聞いたようなフレーズに、俺は子どもの頃良く食べたチョコ菓子を思い浮かべる。

いや、問題はそこじゃない……。

「俺は、お前の毛を五百本も食べたってことか！」

「うん。一日三本ペースで、一年弱。早かったねえ。さすがヒデキ君。前のターゲッ……ご主人様だったヒロミの家では、ボクも小さかったし、なによりしつけが厳しくて人間の食べ物には近寄らせてもらえなかった。その点ヒデキ君はおおらかで助かったよ」

明らかに褒め殺しと分かる台詞に、俺はイライラが募り、耳の後ろをカカカと掻いた。

その間も、ゴローは夢見るようにぼんやりと俺を見つめながら語り続ける。

「ボクは猫年齢で一才三ヶ月だけど、人間に換算するとちょうどヒデキ君と同じ年くらいかな。ママはボクの体を心配してたけど、だいぶ足腰もしっかりしてきたし、今のところ健康優良児。これも全部ヒデキ君のおかげだし、こうして猫又修行にも協力してくれて感謝してるよ。まあ、ヒデキ君はその体で猫の生活を楽しんでよ。あ、試練の日程は四泊五日だからよろしく！」

なんともリアルな話っぷりに、俺は自分の体を見つめなおした。

茶色に白地が混じる、雑種猫にありがちな体毛。やけに敏感な耳と、複雑な家のニオイを察知する鼻、そして床を押すとぷにぷに弾力のある肉球。

「おい、これは夢なんだろう……？」

「五日経ったらボクたちは元通りになる。ちょっと長めの夢だと思ってくれたらいいよ」

ゴローは、猫のように目を細めて笑った。

「今すぐ、戻すことはできないのか？」

「まあ、できなくも無いけど……失敗すると大変かも」

「一応聞かせろよ」

「ボクが今の体で、キミのヒゲか毛を飲んで条件クリアすれば、もう一回入れ替われると思う。でもママに聞いた話だと、失敗したらこんな風に心が入れ替わるだけじゃなくて、体も混ざっちゃうらし

い。特に端っこにある部分……耳と尻尾が危ないって」

チラリ、と俺は俺の姿を見上げる。不細工ではないが決して可愛くは無い……むしろ小汚い、仏頂面の男がいた。

そこに、猫耳としっぽをつけた姿をイメージしてみると……。

——キモイ！ キモ過ぎる！

そんな姿になったら、もう秋葉原でしか生きて行けない！

その後、俺はゴローが「ハゲちやうから勘弁してっ！」と泣きを入れるまで、耳の裏を掻いた。

くグルメ猫・その2く（後書き）

←解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

猫生活最初のトライは、お風呂でございました。まだ序盤だというのに、既にヘンタイ風が爽やかに吹き始めております。ヒデキ君が布団の中で何をしているかといえば、いわゆるオ……ゲフンゲフン。分らない方は、ちょっと年上のお兄さんに訪ねてみましょうね。（この話は全年齢向けです。自重自重）さて、今回は猫又変身の条件について、アバウトな解説編でした。もちろんフィクションです。猫飼いさんたちは、猫毛をそれくらい食べるかもしれないってのはノンフィクションですが。猫毛を一日三本程度飲みこんだところで、人間のお腹にヘアボールなどはできませんのでご安心を。食物繊維と同じく、消化されずにあそこから出て行くそうです。舐め猫は、知らない人居ないよね？ あれ最強に可愛いですよねっ！うちにグッズが一個だけ残ってて、ときどき眺めてニヤニヤします。なめんなよ生徒手帳。はあはあ。

次回は、ヒデキ君の猫生活一日目の夜。ついにタイトルの通り『グルメ』の話に入っていきます。腹ペコなヒデキ君の目の前に、キヤットフードが差し出されて……こうご期待。

くグルメ猫・その3く

3. 一日目・夜。

昼にカレーを食べた俺（今はゴロー）も、ドライフードを食べたゴロー（今は俺）も、さすがに腹が減ってきた。

ゴローは、いつも俺がするようにタッパーを開け、ドライフードをスプーンでひとすくいして小皿に移す。水を代えてくれている間に、俺はふらふらとその餌に吸い寄せられていった。

一度、手の先でツンツンとつついてみる。小さな三角形の固い粒が、焦茶色・レンガ色・緑色の三色。ときおり混じる純白の丸い粒は、『お肉とお魚&野菜（ミルク粒入り）』という商品名の通りだ。見た目はこんなに不味そうなのに、なんという芳しい香り……涎が口の中にじゃぶじゃぶ溜まっていく。

「ほら、早く“ご飯”食べなよ」

『ご飯』

そのキーワードに、俺の猫スイッチが入った。

「うにゃあっ！」

歓喜の声を上げ、俺はその固いポリポリしたものに鼻を押し当て、本能の赴くままにむさぼりついた。

美味い……なんて美味いんだ！ 噛み締めるほどに口腔内から鼻へと充満するこの香り！ お肉、お魚、野菜……三つのハーモニにマイルドさをかもし出すミルク粒のアクセントがたまらん！

俺がカリカリを食べるのに夢中になっている間、ゴローは冷蔵庫を物色していた。チャリツという特徴的なその音と、鼻腔をくすぐる強烈な香りを感じたとき……俺は目の前のご馳走を放り出し、ゴローの元へ駆け寄っていた。

「何食おうとしてる、てめーっ！」

「っふふふ。ずっとこれを食べてみたいと思ってたんだよねっ」

ゴローが手にしていたのは、正方形の薄い板状のモノ。人間の俺がラッピングされたシートを剥がすたびに、興奮したゴローがニャンニャンと足元にまとわりついてきた、アレだ。

猫の俺は、ゴローの向こう脛に爪を立てながら抗議した。

「それを俺にも食わせろっ！」

「ほほう……これがチーズ。なんとも濃厚でクリーミー、塩味がきいている」

「おーれーにーもー！」

「ダメだよヒデキ君。猫は塩分を取りすぎると病気になっちゃうからね」

「せめて、そのフィルム部分だけでも舐めさせて！」

願いも空しく、フィルムは蓋のついたゴミ箱へひらりと消えた。

ニオイが無くなると同時に、俺の欲求も萎む。すごすごとカリカリ前へ戻る俺に、やけに力無いゴローの声が届いた。

「ヒデキ君、なんだかボク、力が出ないよう……これだけじゃ腹の虫がおさまらないんだけど」

「当たり前だろ、スライスチーズ一枚じゃ……ていうか、その慣用句間違ってるし」

「あのさー、聞いてくれる？　ボク人間になったら叶えたい夢があるって」

「何だよいきなり」

「グルメ……」

俺の第六感が、嫌な展開を予測する。尻尾がしゅるつと股の間に入り、また耳の裏がかゆくなってきた。本当にハゲたら可哀想だから耳を掻くのは我慢し、代わりに腕や足を舐めて心を落ち着かせる。「人間の舌は、猫よりも複雑なんだってね。しかも、味覚は五つもあるとか」

甘味、酸味、塩味、苦味、旨味。

俺が過去に学んだ雑学を、複雑極まりない人間様の脳ミソから引っ張り出しつつ、ゴローはニヤリと笑った。

「この五日間で、五つの味覚を堪能する……うん、素晴らしい目標だ。人間とは自ら目標を立て、自己実現の達成に向かう生き物である」

「ちょっと待て」

「ヒデキ君も、猫の味覚を愉しんでみたいだね。さて、人間の世界は“お金”というものがあれば何でも手に入る、と……」

俺の鞆から財布をまさぐるゴローに飛び掛った俺は、懇願した。

「やめてくれっ、俺の小遣い……夏休み博美とデートしようと思っ
て溜めてたのにー！」

「いいじゃん、ちょっとくらい。可愛い飼い猫には旅をさせろというし。それにヒロミとはもうサヨナラしたんでしょ？」

「間違ってる！　いろんなことがっ！」

ゴローは財布をジューパンのポケットにねじ込むと、キッチンの食器棚の引き出しからあるモノを取り出した。

それは俺がゴローの爪を切って怒らせた後に、必ず与えるもの。

「お詫びに、キミにもこれをあげるから、ね？」

ゴローは躊躇せず、その小袋を開けた。

「――フニャアアッ！」

マタタビ……酒もタバコも苦手な俺にとって、それは初めて経験する悪魔の粉だった。

何度も床を転がり、柱の角に体をこすりつけながら、俺は「せめて食費は一日千円以内で……」と壊れたレコーダーのように呟き続けた。

＊

俺がマタタビで夢の世界を旅行中、コンビニへ出かけたゴローは、意外とあっさり帰ってきた。なんでも、暗い中を歩くことや車のク

ラクシヨンが怖かったらしい。

一方俺の方は、電気もつかない暗がりでも快適だ。何かにぶつかりそうになればヒゲがぴくりと動いて、危険察知のセンサーになってくれる。

「ところで、何買ってきたんだよ？」

ようやくまたたびが抜け、正常な思考を取り戻した俺がテーブルに飛び乗ると、ゴローはレジ袋を俺の前に置いた。うっすら透き通るその袋の中に、俺は大好物を発見する。

「こ、これは……」

「うん、菓子パンとアイスだよ。一日目は“甘み”を堪能するんだっ」

俺は涙を流す代わりに、スンスンと鼻を鳴らしながら腹の毛を舐めた。菓子パンもアイスも、特別良いことがあったときのご褒美にしていた。いつもはスーパードで一斤百円の食パンを買い、同じく一個百円のジャムをつけてごまかしているのに。アイスなんて贅沢品はもう何日食べていないか……水道水の自家製カキ氷で我慢しろっちゅーねん……。

「なんとなく美味しそうだなーと思ったものを選んだけど、これはヒデキ君の記憶にあったからなんだね。しかし、甘みって癖になるねえ。止まらないや」

白い砂糖がかかったうずまき状のデニッシュ。表面がツヤツヤしたアップルパイ。本物のメロン果汁が入ったメロンパン。

そして、あのアイス……。百円のラクトアイスならまだしも、俺が食べたくても手が出ないと涙を吞んでいた二百五十円の高級アイスクリーム、しかも期間限定リッチミルク味……。

「そんなに恨みがましい目で見ないでよ。ヒデキ君にも一口あげるからさ」

デニッシュ生地のはらりと剥がれ落ちた皮が、アイスの蓋と共に目の前に差し出された。人間思考の俺はそこに飛びつきたいのに、猫という名の戦うボディが邪魔をする。

嫌がる猫本能をなんとか押さえつけ、俺はそこに舌を伸ばした。
デニッシュ皮を舌ですくい、くちやくちやと噛み締めてみる。次に、溶けて液体状になったアイスのミルクをぺろり。

「……味、しねーし」

さっきのかりかりと比較するなら、百点満点の十点。

猫背になってうつむく俺を尻目に、パンとアイスで腹を満たしたゴローは満足気に舌なめずりすると、突然びくんと体を震わせた。

「おおっ、なんかもよおしてきたよっ。人間の体って不思議なくみだねえ。食べたらすぐそれが出てくるんだから」

ゴローにそう言われて、俺も思い出したように下腹部を気にする。さっき食べたかりかりは確実に消化中。しかし腸の奥にまだ固いもの残り、手前まではあと一押し足りない。

「俺、ちよつと走ってくるっ！」

とりあえず、十四畳のリビングを端から端まで三往復ダッシュしてみた。イイ感じにアレが盛り上がってきたそのタイミングで、俺は玄関先にあるトイレにまたがった。

『ムリムリムリッ……ムリッ』

フニャウーと息を吐きながらお尻をピクピクさせた俺は、ツーンと立ち上る香ばしいそのニオイが鼻につき、顔をしかめた。人間の俺が感じるよりよほど不快だ。

ていうか、なんだか猛烈に恥ずかしいっ！ 早くそれを隠したいっ！

俺はできる限りこんもり砂をかけると、そろそろと猫足でそこを離れた。トイレから出て来たゴローが「ねえ、人間のアソコって……」と話しかけてくるのを遮り、俺は叫んだ。

「ゴロー、トイレのアレ、早く始末してくれよっ！」

「了解。じゃあヒデキ君も、ソコをきちんと始末しておいてね」

そのとき俺は、猫の勘で察した。ゴローが始末しろと命じたのは、俺の……さっきアレが出て来たソノ部分。背中を床につけ、体を思いつき猫背に曲げてみると、小さな蕾みにアレのカケラがついて

いるのが見える。

ま、まさか……。

俺は信じられずにブルブルと頭を振りつつも、そこから視線を逸らせない。猫本能により、吸い寄せられるようにその場所へ舌が伸びていく。

アレを、早く取り除きたい。

「おい、ゴロー……濡れタオルでぬぐってくれよ……」

喘ぎながら必死で伝えた言葉は、この非情な男には届かなかった。

「大丈夫だよ、猫の舌だと“苦味”って味覚は薄いから」

さて、もう一回シャワー浴びて来よつと言いつつ、ゴローはその場を立ち去った。

一人にしてくれたのは、武士の情けなのだろうか。

ああ……もう逆らえない……。

舐めたい……。

俺はこの日、人として大事なモノを失くした。

ゝグルメ猫・その3ゝ（後書き）

←解説&作者の言い訳（痛いかも？）です。読みたくない方は、素早くスクロールを。

今回は、ソーとーお下品な話でした。申し訳ありません……でも、猫の気持ちになってもらえたはずです。アレとこっち、食べるならどっちがい……ゴホン。では一点補足を。トイレから出てきたゴローが言いたかったこと……はスルーしまして、真面目な話をば。猫にとってカリカリの色は識別できません。分かりやすさのために、そこだけフィクションにしてあります。そこだけ……はい嘘です。ツーンな匂いが恥ずかしいとか、あっちこっちにフィクションがございます。でもチーズやマタタビの話も含め、基本は猫の生態をリサーチして書いております。そして今回ようやくグルメの話になりました。実はこの話を書く際に『5』というお題が決められていたので、5つの味覚を5日間という設定になりました。ちなみにゴローが食べていた菓子パン&アイスは、全て作者が愛している物です。本当は『ナイスステイック』が一番好きなのですが、地味過ぎ

て描写が難しかったです。それこそ細長い○……ゴホン。他にも小ネタが散りばめてありますので、見つけたらニヤツとしてください。

次回は、二日目三日目と一気に進みます。グルメネタ中心で、あまりお下品にはなりませんのでご安心くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0481z/>

四泊五日グルメな子猫ちゃん体験ツアー

2011年12月3日06時47分発行